

## カナダ・アメリカの旅 (一)

津守 真

保育の仕事は、時間的に縛られることが多く、空間的にも子どもからはなれることができず、肉体的にも限界に遭遇する種類の仕事である。このことはどんな仕事にも共通することであるが、保育においては、特に具体的にこのことを感じさせられることが多い。それを束縛ということばで考えたとすると、一面的になる。実際には、保育の場は、大人と子どもとの間にさまざまなことが行われ、その中でそれぞれが自らの人生を生きている豊かな現実である。それは、子どもの人間的成長を中心として、そこに参与する人々すべてが、人間として形成

されることを課題とする。保育は、日々直接に子どもの成長を助けつつ、人間の文化をそこにつくり上げてゆくとする、能動的な精神の営みを根幹とする。そこでは、実践と学問、思索と理論とは切り離しがたい。保育の実践を支える学問、実践の思索に基づく理論の形成は、この現代に、子どもの仕事をする者にとって、共通の関心ではないだろうか。

このようなことを考えていたときに、カナダのエドモントンで、第四回の Human Science Research Conference (人間科学研究会議) が開かれることを知ったので、こ

れに参加することにした。これは、現象学的教育学を志す人々の集まりである。もともと、保育は人間の現象であるから、ことさらに現象学的と規定する必要もないように思われるし、それをひとつの学派と考えるならば、それは狭義になりすぎる。そのような考えが、ランゲフェルトその他、この学問を推進してきた人々の中にあつたからであろうか。各地に同じ考えの人々が散在しながら、これまでひとつの学会や組織が形成されることがなかった。今回のこの会議においても、その開催校である

アルバータ大学のファン・マンネン教授は、その歓迎の辞の中で、「われわれは単にゆるく結ばれたグループなのか、あるいははからずも形成することとなった人間科学の学会連合体であるのかはきめがたい」と述べている。私は、このような開放的な態度に好感を覚える。眞実は、ひとつの学派や団体が占有すべきものではない。同じ考えを持つ者が、互いに知りあつても、全く同じ考えの者は一人もなく、共通の根幹において、「ゆるく結び合う」のみである。しかし、現代のように、実証論理

的方法論だけで、自然をも人間をも切り刻み支配しようとする傾向の強い時代に、学問としても子どもという対象を研究者、教育者から切り離すのでなく、人間の全体の中で見てゆこうとする考えの人々が、共通の場を作ろうとするのも当然の動きであろう。

今回、私がこの会議に参加して見聞したことからはじめて、久しぶりに、カナダ、アメリカを訪問した体験と感想を記したいと思う。

#### 人間科学研究会議

ヴァンクーバーから飛行機で約二時間、平原の上をこえて、カナダでも最北端の市、エドモントンに着いたのは、すでに夜の十一時過ぎであった。翌日は、朝から快晴で、カナダの五月末はすでに真夏である。あらゆる花々がいちどきに咲き盛っている。こでまりに似た花、りんごのような白い花など、いずれも似ていても日本の樹木とは違う。宿舎の学生寮から、広々とした緑のキャンパスの中を歩いて会場の建物にゆく途中、この広い場所

に、あの子ども、この子どもを連れてきたら、どんなだろうかと何度も考えた。

会議は、五月二十一日火曜日の夜から始まった。名前を登録し、ワインとチーズをとりながら互いに会話を交す。この大学の大学院学生である中年の婦人が、遠来の客をもてなすためか、あるいは私のレポートのアブストラクトを知ってか、この市の幼稚園が、遊び、人間性等をことばでは標榜しながら、実際には時間割で子どもを追いかけるようなことをしている、どうしたらよいのだろうかと話しかけてくれる。オランダから、ユトレヒト大学のベークマン教授の、ジーンズ姿で白髪をふり乱したの風ぼうにも数年ぶりで接した。

会議は全体会の講演とシンポジウム及び、個人発表から成っている。個人発表は一人四十分で、フッサール、ハイデッカー、メルロポンティ、ヘーゲル、アルント、サルトル、ディルタイ、ソクラテスと名付けられた部屋の教室で同時に行われる。その中から私に印象深かったことを中心に記すことにする。

混乱の時代の子どもの悩みの源流と、安定感の抛りどころ

五人の報告から成るこのシンポジウムで、最も感銘を受けたのは、司会者であるアリゾナ州立大学、アオキ教授のイントロダクションであった。子どもの世界への問いと題して、次の点が指摘された。子どものことについては、従来多くの研究がなされてきたが、子ども自身の側からの見方と、子ども自身の考え方については研究がきわめて不足している。研究者は、子どもの世界を研究すると言いつつ、その周縁をかするだけで、表面的である。大人は幼児について勝手にいろいろのことをいうが、子どもの内側からの見方については無知である。子どもの保育、福祉、発達に関心をもつ者は、子どもの現実にもまじめにとりくむことが要請されている。そのためには、次の点が検討される必要がある。

- 研究における抽象化。理論化をいそぐあまり、子どもの世界の重要なことを、網の目から落している。
- 観察と解釈とを分離。客観的観察を重視しすぎ

て、主観的解釈を排除するあまり、意味が失われる。

○ 専門家の独善。専門家は、素人が近づくことのできないことを知っているとする傲慢さ。

○ 多様な側面から見ることの必要。子どもの世界は、ひとつではなく多くの側面から見ではじめて理解される。

○ 透明な眼をもつことの必要。さまざまな偏見や先入観を除いて、自分の眼を透明にすることが、子どもの研究者に要請される。この点については、東洋には、伝統的に、こうした態度があるのではないかというところが論じられた。

フーストン大学のレンツ教授は、子どもの悩みと遊びの再生産力と題して、現代の子どもが受けている貧困、病気、暴力、戦争、死、離婚などによる悩みは、良い家庭、良い学校、遊びの回復という、一見単純なことに還元されるという。しかし、これらのことは、あまりにあまりまえないので、大人から見逃されてしまう。遊びは、自分自身になることであり、創造し、また再創造する。

遊びとは、おうちごっこ、人形あそびのような名前のつく遊びだけでなく、むしろ形のない遊びがその本質をなす。

若い研究者のパーケイ氏は、シカゴの学校で教師としての体験から報告をされた。私は今回の旅で、この後、シカゴにいったが、日本とは違った都市の教育問題を垣間見て、現実実践と研究を進めてゆく際の困難さを推察した。

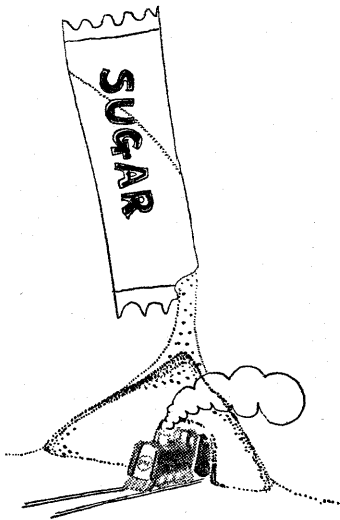
ヤマモト教授は日系の学者であるが、今回、私は、日系の学者が、ことに教育の分野で、良い活躍をしておられることは印象深かった。アルバータ大学でも、教育学の主任教授は、昨年まで日系のアオキ教授だったことは、ここにきてはじめて知った。そのアオキ教授の司会のもとに、コロンビア大学のマクシン・グリーン教授は次のような講演をされた。それは、この会議の基調講演のひとつと考えてもよいものであった。

## 教育実践の理論——そのはじまりと可能性

過去二十年間に、教育実践について、数多くの批判的理論が展開された。それらに共通のことは、実証的立場をしりぞけ、人間の意識と生きた体験に関心をもったことであつた。教師は自らが能動的な著者であることの感覚を失いつつあるのが現代である。教師が他人によって操作される教育技術主義から脱し、その犠牲となることを拒否するのにはどうしたらよいか。想像力と解釈力が回復されねばならぬ。若い人々と心を開き、彼らがま

だ手にしていかないものに向つて力づけるために、それに必要な理解力を必要としている。しかし、現代の圧力のもとで、教師は生徒と共に未来に向つて生きることがいかにしてできるだろうか。彼らはいかにして子どもの可能性を見出し、それを追求することができるだろうか。

子どもと共に自分も年をとりながら、教師は世界の欠落を次第に補つてよりよくさせることができるのだろうか。教師は子どもに対して心を開くことにより、子どもにも自らを開いて生きる態度を教えることができるのだ



ろうか。そして互いに自らを変容する者となりうるか。いかにして。

年輩の女性の哲学者であるグリーン教授は、講演の間も、長身にパナマの帽子を頭にのせ、背筋を伸ばして語られた。デュニーのもとに学び、哲学的遍歴をへて、現象学に到達し、現代における教育学は、人間性の守り手であるとの認識に至った。そのことを雑誌の上で読んでいた私は、実際にその風ぼうに触れて、印象を新たにした。個人が常に強風に曝されて立つ西欧の社会で、思想の根底において時代の潮流に抗して立つのには、常に自らを励まし、際立たせる必要があることは、島国に保護されて育った私共が推察する以上のものであろう。

言語をこえて——表現できないものの表出について及びその現象学的研究の効用

オランダからの若い研究者が数人あり、いずれも興味深い報告であった。これはユトレヒト大学のディンスケ女史の報告である。

忘却が記憶を前提としてるように、表現できないことは表現との関連においてのみ存在する。一方の存在は対極の他方の存在を前提としている。暗黒は光の欠如態ではなくて、それ自体の中に存在するものがある。表現できないものは、実際に存在しているものの現象である。デカルト流に言えば、表現されないものは否定され無視されるのであるが、言語で表現されえないことの中には多くのことが含まれている。このような序論からはじまって、ファン・ウドスホーンという作家の書簡文学を題材にして論を進めるのであるが、子どもの問題にも共通なものを感じさせられた。後で話したところによると、ユトレヒト大学でフェルメール先生のもとで臨床の實習をしてきた人であった。エディット・フェルメール先生は、この雑誌に何度か書いて下さったことがあり、馴染みの方があると思う。

これと類似した研究に、インタールヴェーを超えて——現象学的研究による自己表現の研究という報告があった。テッシュというサンタバーバラの人である。インタ

ーヴューは、他人の体験を知るのに良い方法であるが、幼児や障害児などは、生を生きただけで、言語的反省は少ないから、この方法を用いることはできない。世界の中にあることと、それについて語ることは同じことではない。赤ん坊が泣くのは直接体験の自己表出であるが、反省を経た自己表現ではない。それでは行動にあらわれた表現を、子どもの体験の表出として理解するには、どうしたらよいか。それは私共と共通の課題である。

三日目に、講演や発表の合間に、アルバータ大学のシュミット教授が私のところにカードを持ってこられた。オランダのランゲフェルト先生が、一昨年は夫人を亡くし、昨年は娘さんを癌で亡くされて、苦境の中にあるから、先生を知っている人たちの間をまわって寄せ書きを集めているのだという。シュミット教授はすでに退官されているが、長年ランゲフェルト先生と親交があり、先生が日本にこられ、お茶大で講演されたことも知っておられた。この会議には、ランゲフェルト先生を知ってい

る人が数多く、ドイツのミュンヘン大学のヘルムート・ダンネル教授は、ランゲフェルトの著書をオランダ語からドイツ語に翻訳された人でもある。シュミット教授自身は、ウィリアム・シュテルン（一八七一—一九三八）——世界観、世界、研究法についての省察と題して報告をされた。シュテルンは、幼児期の心理学という古典的な書物の著者であり、私が大学生の頃から知っている児童心理学の創始者のひとりである。人間的洞察力をもって幼年期を考えており、現代に再読される価値がある。シュテルンは、ランゲフェルト先生の恩師にあたる。

最終日の最後の個人報告の部で、オランダのライデン大学のベルケラール女史が、方法的問い——現象学的研究に経験的方法を用いることができるか、という報告をされた。これは、ライデン大学の子どものクリニックでなされた障害児、自閉症児の臨床の資料にもとづいている。考え方として、障害児の臨床において、障害に着目するのではなく、障害を受けている子どもを育てることを考えるのであることを強調して述べられた。私はそ

の点で同じ考えであるので、心強く思った。そのような見方での臨床体験から、障害をもつ子どもの特色として次のような分類を試みていた。「1、社会性、a、関係の欠如、b、言語の欠如、2、身体性、a、顕著な運動面の現象、b、顕著な感覚面の現象、3、解放性、a、変化への抵抗、b、極度に不合理な恐怖」これは実際体験にもとづいた分類のように思われる。現象学的教育学は、ともすると哲学に偏して、実践が稀薄になる傾向になる危険があり、子どもの世界そのものに着目し、それを尊重する実践がしつかりとなされている報告には共感を覚える。ベルケラール女史も、後で話をしたところ、ユトレヒト大学でフェルメール先生の指導を受けた人であることを知った。

エドモントンのダウンタウンからは、サスカチュワン河を隔てた丘の上にある広いキャンパスの中で、朝八時半から夜にいたるまで五日間にわたる会議を終えて、私は、実践を尊重する理論をつくり上げようとする人々

が、世界の各地に生れつつあることを思い、心強く感じた。このような人々は、団結して動くことはしないだろうけれども、ゆるく結び合い、それぞれの場所で、子どものための戦いをつづける人々であろう。

カナダの五月の夜は、十時になっても、青空に太陽が輝いている。ほとんど眠る暇もなく、翌日の朝五時に宿舎を出て、妻と共に、アメリカのシカゴに向った。シカゴ大学のベッテルハイムの学校を訪ねるためである。

(愛育養護学校)